

当然のことはただけです ルカ17:5~10 / 李正雨師

最近、うちの次男が私にいつも言っている言葉があります。勉強が終わったら何してくれる？野菜全部食べちゃったら何してくれる？などの言葉です。自分がしたことに対する見返りを願っているのです。しかし、考えてみると、すべてが次男自身のためのものです。自分のために勉強して、野菜を食べるのに、何かで報われるように願っているのです。善い行いと報い、この2つのカテゴリは、私たちに多くの影響を与えたと思います。だから、多くの人々は良いことをすれば、いつか報われることがあると思っています。そしてこのような考えは、いくつかの宗教にもよく示されていますが、一般的に神は善いことを行う人に報いを与えてくださるからです。イエス様の時代のユダヤ教も、このような考えに満たされていました。そのため、人々は善を行うためにいろいろなことを思いつきましたが、その中の代表的なことが律法を守ることでした。神様の言葉である律法を徹底的に守れば、神様は喜ばれ、律法を守る者に報いを与えてくださるということが当時の人々の考えでした。しかし、皆様もご存知のように、律法というものは報いのものではなく、信仰の共同体が生活する上で最も基本的なものです。例えば、十戒の中で「殺してはならない」という戒めを守ったといっても、「盗んではならない」という戒めを守ったからといっても、善い行いをしたとは言えません。このような戒めは、一緒に生きるために必要なもので、善い行いではないからです。十戒の他の戒めも同じです。十戒を守る理由は、私たちが信仰の人として生きていくために必要なことなので、守るのです。善を行うために守るものではありません。しかし、律法に縛られている人々、特にファリサイ派の人々は、律法を守るのが善であると思いました。このような考えは、イエス様の時代の多くの人々に影響を与え、イエス様の弟子たちもこの影響を受けて育ったと思います。

ところがイエス様は、今日の福音書を通して弟子たちに律法を守ること、ご自分の教えに従うのは当然のことをすることだと言われます。律法を守ったとしても、イエス様に従ったとしても、何か報いを受けようと思っただけではいけないのです。私たちが私たちの文化と習慣に従うように、クリスチャンはキリストに従うのです。これは決して特別なこと、善い行いをすることではありません。クリスチャンとして生きるために、しなければならないことです。今日の福音書はこれを私たちに教えています。私たちが信徒として行うすべてのことは、クリスチャンとして当然しなければならないことだということです。今日の福音書は使徒たちの言葉から始まります。5節の言葉です。「使徒たちが『わたしどもの信仰を増してください』と言ったとき」

私はこの「使徒」という言葉が出てきただけで、異例に属することだと思います。一般的に福音書で「使徒」という言葉が登場したときは、特別な状況や強い指導などを伴います。ルカによる福音書でも、イエス様が弟子たちを召される時、派遣なさった時、復活なさった時、この「使徒」という言葉が登場します。つまり、今日の福音書の教えも、私たちが簡単に理解して受け入れやすいのではないということでしょう。イエス様は、この使徒たちの求めに不可能のようなことを語られます。6節の言葉です。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。」

なぜイエス様は、このように言われたのでしょうか。信仰があれば奇跡を起こすことができるということでしょうか。私は、この言葉が信仰というものは何なのかを教えてくれているのだと思います。信仰は難しいことを、不可能に見えることを可能にします。イエス様に従わせ、自分を低くさせ、狭い戸口の中に私たちを入れさせます。そして、その中で素晴らしいことができるようにさせます。その中では、イエス様の言葉に従って、自分に罪を犯した者を許し、受け入れることが行われます。隣人を助け、神の国のために自分

のことを犠牲にすることが行われます。このようなことは、他人の目には、大変なこと、難しいことに見えるかもしれませんが。しかし、信仰の中にいる私たちは、どんな報いも望まず、そのことを行うことができます。これだけでなく、このようなことを私たちがしなければならないこと、当然のこととして受け入れることもできます。なぜなら、信仰が私たちを導いてくれるからです。信仰が私たちをクリスチャンとして生きさせるため、このようなことが可能になるのです。

7節の言葉です。「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。」この言葉は人権に関する言葉ではありません。当時の僕と主人の関係を示しているのです。僕の苦勞に感謝する主人はいません。主人にとって僕が行うすべてのことは、当然のことだからでしょう。主人と僕の関係は、夫と妻の関係とは違います。夫が一日中畑で仕事をしたなら、妻は夫の帰りを迎え、食事などを準備するでしょう。しかし、主人と僕との関係は、そうではありません。僕が大変な仕事をしたからといって、主人は僕のために相互の義務を果たす必要はありません。むしろ、8節の言葉のように働いてきた僕は、主人のために給仕をしなければなりません。それが僕の役割なのです。

イエス様は、これが私たちが持たなければならない態度だと教えてください。私たちが信徒として行っていること、礼拝と奉仕、人を助けて、イエス様の言葉に従うことなどは、信徒が当然にすべきことなのです。これらのことが私たちに報いをもたらす手段になってはなりません。私たちがクリスチャンだから、キリストに従っているから、このすべてのことは、私たちが当然にしなければならないことなのです。10節でイエス様は私たちにこう言われます。「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

もし私たちが自分のしたことを主張したら、それは神様を負い目のある方に扱うことなのです。神様と主従の関係ではなく、相互義務的な関係になるということです。そんな愚かなことをしてはいけません。神様は神であり、私たちは神の僕です。私たちのしたことが当然のことになると、神様も当然に私たちの神になってくださるでしょう。

私たちの礼拝の式文の中に、このような言葉があります。聖餐の部の23番「その日の序詞」の言葉です。「いっどこでも、私たちの主イエス・キリストにより、あなたに感謝するのは当然であり、また、ふさわしいことです。」私たちが神様の僕になること、僕としてしたすべてのことが当然のことになること、これも私たちが感謝することであり、ふさわしいことです。そして、このことは私たちのためなのだと思います。親が子供にさせるすべてのことは、子供のためであるように、神様が私たちに望まれるすべてのことは、私たちのためであることに間違いありません。皆様、自ら取るに足りない僕になってください。そして、皆様が行ったことはすべて当然のことだと告白してください。その信仰告白によって神様はいつも皆様の神様になってくださるのです。神様が皆様の信仰を導いてくださるように。その信仰の中で驚くべきことを行う皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン